

CNEAS

newsletter

Center for Northeast Asian Studies



2024 Spring

巻頭言

異分野融合部局に関する一意見

千葉聡 (教授)



懐かしいーこれが東北アジア研究センターに私が赴任した当時の印象であった。今は当たり前になってしまったので、あまり意識することはないが。

私は地理学科の出身である。異分野融合の小さな部局、という点で、本センターとよく似ていた。そこで行われていた研究も、文化人類学や歴史学、社会学などを含む人文地理学、第四紀地質学や気候学が中心の地球科学、生態学、都市工学などで、特にモンゴルと中国西部の乾燥地帯の地形、気候、文化の研究が精力的に進められていた。セミナーはこうした様々な分野が一堂に会するので、実際のところ学生が少ない点を除けば、センターの談話会の内容や雰囲気とあまり変わらなかった。

ちなみに私は人文地理の先生の下で文化人類学を学ぶ予定で、卒業研究テーマも決まっていたのだが、途中で指導予定の先生がフランスに留学してしまったため、引き継いだ教員の方針で地形学という地球科学の一領域を卒業研究のテーマにしていた。今の私の専門である生物学は、当時の私にとって趣味の位置づけであり、これは背景に「趣味と仕事は別にすべき」という哲学があったせいなのだが、今の状況を考えると皮肉である。

こうした経緯から、異分野が集まった部局の利点と欠点には、一定の意見を持っている。利点の一つは、異分野に対する偏見がなくなるので、すでに自分の専門を確立した人には、新しい発展が期待できることだ。私も本

センターに着任以来、この恩恵を受けて、遺伝学と歴史学を融合した新しい研究を展開することができた。また問題解決型の研究プロジェクトの場合や、「東北アジア研究」のようにミッションが明確な場合は、大きな威力を発揮する。

欠点は、意識しないとバラバラ感と中途半端感が強まることである。特にまだ専門性を獲得する途上の学生には、異分野への抵抗感がなくなる一方で、よく注意しないとスペシャリストとしての知識やスキルが不足する場合がある。

理想的なのは専門家とそれが責任をもって指導する学生の枠組みを備えたうえで、異分野が集まることであろう。その点で、本センターの仕組みは、ひいき目かもしれないが、理想とは言えぬまでも今のところかなり好ましいように思われる。国際情勢の悪化のため、ロシアなどの研究に難を生じている状況ではあるが、それならば組織のこうした独自性を活かすことで、新しいテーマに取り組み、難局を乗り越えることも可能であろう。

国際卓越研究大学に向けて本センターも激変は避けられないが、持てる利点と武器を意識していれば、これを機にした飛躍的發展も可能だと考えている。

contents

- 1 巻頭言
- 2 「The Newsletter CNEAS」創刊100号
- 3 新任ごあいさつ
- 4 最近の研究会・シンポジウム、展示会ほか
- 7 著書・論文紹介
- 8 活動風景



「The Newsletter CNEAS」創刊100号

text: 平野直人

東北アジア研究センターの発足(1996年5月)から3年後の1999年、「The Newsletter CNEAS」はセンターの活動を伝えるメディアとして発刊されました。以降、年4回の季刊誌として続き、この2023年度最終号でついに記念すべき第100号となりました。これまで発刊されたニューズレター100号すべてセンターのホームページで見ることができます。本ページにはこれを記念して創刊号の表紙を掲載しました。閲覧できる当時のニューズレターからは、地域研究そのものの意義を具体例とともに説明されていたり、学際研究プロジェクト発足の経緯を報告していたり、挑戦的な意図で「文理融合」を「分離融合」と記述していたり、非常に読み応えがある

と同時に、当時の様々な模索が読み取れます。

そして「The Newsletter CNEAS」創刊から25年が経過したいま、当初東北アジア研究センターに設置された5つの研究分野が拡大し、現在は10を超える研究分野で構成されています。また、東北アジア研究談話会も昨年10月で第100回目の開催を迎えました。2013年に発足した研究談話会は、ほぼ毎月開催され、お茶を片手にセンターに関わる研究者が話題を提供し、ざっくばらんに議論を行う会です。談話会での議論をきっかけに新たな学際研究が生まれてきたことでしょう。共同研究は、自然環境から移民文化交流、歴史と政治に至るまで、現在17もの学際プロジェクトとし

て動いています。

ニューズレターは創刊号を除き当初表紙以外は白黒印刷でした。2012年第57号からカラー版となり、2020年第85号から令和時代の洗練されたデザインに刷新されました。創刊号で初代センター長が描かれた「文化・技術交流」「分野の有機的融合」「研究交流体制」「外部研究者との連携」といった理念や目標は、様々な模索を経て、現在存在する多くの学際プロジェクトに受け継がれています。センター研究者の活発な学術活動が無いとThe Newsletter CNEASは決して成り立たないことを考えると、第100号を迎えた重みを感じます。次は、第200号発刊を目標に!

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター The Newsletter CNEAS

創刊号

発刊の辞



東北大学東北アジア研究センター長

吉田 忠

本研究センターは、従来学術交流が必ずしも充分ではなかった東北アジア地域を、総合的・学術的に研究する機関として平成8年に設置されました。以来3年間、一同、個人レベルでも、また組織的プロジェクトとしても本センターの設置目的にふさわしい研究を推進してきております。さらに平成10年には、シベリアのノボシビルスク市アカデミータウンに、ロシア科学アカデミー・シベリア支部の協力のもと、本センターの連絡事務所(通称日本館)を開設し、日本とシベリアの学術、文化、技術の交流と日・ロの友好促進に貢献する拠点として活動を展開しております。本センターは、人文科学諸分野と自然科学や技術開発分野を有機的に結合・融合することにより、今世紀末になって顕在化してきた人類の当面するさまざまな課題の解決に向け、創造的な研究の進展と東北アジア地域との学術交流の促進を期しております。

しかし、より一層体系的で精度の高い研究成果を得るには、外部の研究者の方々との連携は不可欠であり、人的ネットワークを通じた研究交流体制の構築が求められております。そうしたネットワーク化のための一助としてニューズレターが大いに機能することを期し、ここに発刊する運びとなりました。もって私たちの活動の一端をお伝えできますならば幸いです。

▲ 1999年創刊号の表紙の一部

#1



Donatas Brandišauskas

外国人研究員(客員教授)
[2024.02 ~ 2024.03]

ドナタス・ブランディシャウスカス ▶センター
客員教授、ヴィリニウス大学教授

マルチスピーシーズ民族誌から見る シベリア森林の狩猟牧畜民研究

translator: 高倉浩樹

私は、東シベリアとロシア極東の先住民エベンキ族のトナカイ牧畜と狩猟に関する民族誌を専門とする社会人類学者です。主な興味は、人間と動物の関係、アニミズム、先住民の知識とロックアートの認識、そしてタイガ遊牧民の研究にあります。私はリトアニアのヴィリニウス大学アジア・トランスカルチュラル研究科教授であり、リトアニア歴史研究所の研究員でもあります。その単著図書『Leaving Footprints in the Taiga: Luck, Spirits and Ambivalence between the Siberian Orochen Reindeer Herders and Hunters』(2017年)は、現代のトナカイ

飼育者と狩猟者における幸運の存在論に関する民族誌的研究です。私の調査研究のなかには、先住民族の土地利用、資源採掘の歴史、トナカイ牧畜業の復活、先住民族エベンキ族コミュニティのマルチスピーシーズ相互作用などのテーマに関わる民族誌的研究が含まれています。最近では、モンゴル北部のドゥカ族のトナカイ遊牧民や狩猟者を対象としたフィールドワーク研究も始めました。リトアニアでは、オオカミやヨーロッパバイソンに関連した人間と動物の対立に関する研究も行っています(本人自己紹介を翻訳)。

#2

臺丸謙

パリ・シテ大学 准教授

ロシア・シベリア研究分野/客員研究員
[R5.12.20 ~ R6.1.21]

研究テーマ: 日本帝国期の疾病の風土性に関する歴史学的考察

#3

Florian STTAMLER

ラップランド大学 北極センター 教授

ロシア・シベリア研究分野/客員研究員
[R6.1.5 ~ R6.1.23]

研究テーマ: Human-animal relations and domestication in the Arctic

#4

Aytalina IVANOVA

ラップランド大学 北極センター 研究員

ロシア・シベリア研究分野/客員研究員
[R6.1.5 ~ R6.1.23]

研究テーマ: Legal anthropology of Arctic Indigenous Peoples in Siberia

COLUMN

東北アジア研究談話会 ~第100回を迎えました

東北アジア研究談話会は、共同研究等の企画着想の機会を提供するために、原則毎月一回、コーヒー・お茶を飲みながらセンター内の研究交流・親睦を深める会です。ニューズレター同様、談話会も昨年の10月で第100回を迎えました。

第100回: 10月30日

- ウクライナ侵攻後におけるロシア避難民とモンゴルにおける民族間関係(高倉浩樹、堀内香里、ジャンバジャフ)
- 軽石噴火において噴火を停止させる要因—十和田火山での事例研究—(宮本毅)

第101回: 11月27日

- Nomadic pastoralism and climate change in Mongolia and Southern Siberia(シャーロット・マルキナ)
- 近世後期日本におけるロシア知識とその対外政策・思想への影響(ワシーリー・シェブキン)
- 近世大名家における「家」をめぐる共同性・排他性(根本みなみ)

第102回: 12月25日

- 日本語の専門書における複数を表す表現(クアフエヴァ・ナターリヤ)
- モンゴル、清朝、そして東北アジア(岡洋樹)

第103回: 1月29日

- 沿岸地域社会における気候変動の影響をめぐる学際的研究での人類学の役割: 日本と北極圏の事例から(デレーニ アリーン)
- 戦争・記憶・歴史—中国でのオーラルヒストリー調査より(石井弓)

第104回: 2月26日

- Evenki guides and their cargo reindeer in geological research expeditions of East Siberia and

Russian Far East(ブランディザウスカスドナタス)

- 雲仙普賢岳平成溶岩は流れずに滑りて前進していた(後藤章夫)



全体の様子

東北アジア研究センター公開講演会

「国のコロナ対策と災害対策を振り返る ～厚生労働省の視点から～」の開催



岡洋樹

(モンゴル・中央アジア研究分野/教授)

会期 2024年1月20日

会場 東北大学川内萩ホール会議室

1 月20日午後、内閣官房健康・医療戦略室政策参与である武田俊彦氏をお招きして、「国のコロナ対策と災害対策を振り返る～厚生労働省の視点から～」と題した公開講演会が



講演する武田俊彦講師

開催された。講師は東京大学法学部卒業後、厚生省・厚生労働省で医療保険行政・医療政策の分野で局長・審議官など重要なポストを歴任し、さらには総務省消防庁に遷って審議官として災害対策にも活躍された方である。2018年の退官後も、内閣官房政策参与を務めている。

今回は、医療・災害行政の分野を第一線で領導してこられたお立場から、近年の国のコロナ・ウイルス感染症対策と、東日本大震災などの災害対策の実情と課題についてお話をいただいた。

講演では、官邸の危機管理センターの様子や緊急参集チームの活動、危機管理態勢にはじまり、厚生労働省や国土交通

省の災害対応、災害医療体制などが紹介された。また東日本大震災被災地現地における過去の災害の記憶と教訓、現地の人々による伝承活動といったリアルな話題が紹介された。またコロナ・ウイルス対策についても、感染状況の推移の中での医療体制やワクチン・治療薬の問題について詳細なお話をいただいた。いずれも医療・災害行政の第一線で指導的立場から関わってこられた先生ならではの、豊富なご経験と知識、体験を踏まえたご講演であった。講演後の質疑応答の時間では、会場から多くの質問・コメントがだされ、活発な応答が行われた。

共同主催イベント(写真展、トーク、ワークショップ)

魚のある暮らし—白老とシベリアのお話—



是澤櫻子

(東北大学環境科学研究科博士課程後期、国立アイヌ民族博物館)

会期 2023年11月25日

会場 またたび文庫(北海道)

筆 者が住む北海道・白老町で「魚のある暮らし」をテーマに連携イベントを行いました。漁業が盛んな白老町では、スーパーやレストラン、居酒屋など至る所で、白老でとれた魚を白老で食べる生活が当たり前になっています。そのような「魚のある暮らし」をより深く、楽しく知るために、地域おこし協力隊の羽地夕夏さんと本イベントを企画しました。

イベントは「みてみよう(写真展)」「書いてみよう(研究者トーク)」「やってみよう(棒鱈ワークショップ)」の3つで構成されました。

トークと写真イベントでは、白老の漁業とアイヌ文化について聞き取りを行っ

てきた八幡巴絵さん(国立アイヌ民族博物館)と、西シベリアの先住民の漁撈について調査してきた大石侑香さん(神戸大学)をお招きしました。フィールドは違えど「魚のある暮らし」という共通項を通して白老と西シベリアの暮らしを紐解くお二人。合間に来場者参加型のクイズをはさみながら、会場は大きな盛り上がりを見せました。

トークイベント終了後は、棒鱈を叩いて食べるワークショップを開催。白老の漁組から頂いた棒鱈を片手に、来場者同士で叩き方を教え合ったり、研究者と語り合ったり、熱冷めやらぬ光景でした。

本イベントは、ArCSII社会文化課題、またたび文庫、東北アジア研究センター

の共同主催で行われました。開催にあたり、いぶり中央漁業協同組合白老支社、合同会社Waku Wakuしらおい、ARAMAKIさんに大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。



ARAMAKIの鮭箱でつくられた特製ステージでトーク

地質の連続性を紐解く

中国科学院研究者らとの西南日本縦断地質巡検



辻森樹

(地球化学研究分野／教授)

会期 2023年11月29日～12月5日

会場 中国四国地方(広島県、愛媛県、高知県、香川県、岡山県、鳥取県)

中 中国科学院地質地球物理研究所の地質学者で院士の翟明国(ZHAI, Mingguo)教授ら研究グループ8名が、国際共同研究の一環として来日し(2023年11月29日～12月5日)、6日



集合写真、新居浜市別子山瀬場の石碑の前にて

間にわたり、西南日本を縦断する地質巡検を共同で実施した。初日、広島県尾道市から出発、瀬戸内しまなみ海道を經由して四国へ向かい、途中の大島と高縄半島(愛媛県今治市)で、「大島石」で知られる花崗閃緑岩の採石場や海岸沿いの花崗岩類、領家変成岩を見学した。2日目は、新居浜市の国領川沿いを進み、四国山地石鎚山脈を越えて別子山地域で三波川変成岩を調査。3日目、松山から宇和島を経て、四万十川沿いに高知県四万十市の太平洋岸へ出て、四万十帯の枕状溶岩や足摺岬(土佐清水市)の閃長岩を調べた。前日の四国山地山間部の晴れ時々雪の天候から一転し、土佐の太陽は眩しく、風は温かかった。その後、高知市から四

国横断道を使って愛媛県瀬戸中央市へ移動し、4日目は瀬戸大橋を渡り、岡山市の「万成石」で有名な花崗岩採石場を訪れ、さらに北上して岡山県新見市の秋吉帯の石灰岩を見学した。5日目には、真庭市と新見市で周防帯と蓮華帯の結晶片岩、大江山帯の蛇紋岩を調査し、その後日本海側へ北上し、雪が積もる大山(鳥取県大山町)でデイサイト溶岩を観察した。総走行距離は1600kmに達した。巡検中、若手研究者たちと様々な議論を交わし、最終日には岩石試料を梱包して広島空港で共同研究者たちを見送った。今後、彼らと共に東アジア縁の地質の連続性と東アジアの地殻成長に関する国際共同研究を進める予定である。

講座：地域の歴史を学ぶ◎加美

「菜切谷村他三箇村絵図」の謎を読み解く ―仙台藩4代大名綱村の時代への覗き穴―



竹原万雄

(上廣歴史資料科学研究部門／助教)

会期 2023年12月10日

会場 加美町中新田公民館(宮城県)

上 廣歴史資料科学研究部門では、江戸時代の仙台藩士で加美郡城生村(現・宮城県加美町)などに知行地があった北家の古文書を調査し、全点の写真撮影と文書目録の作成を完了した。今回は、この「加美町北家文書」を活用し、地元加美町にて江戸時代の武家社会を研究されているJ.F.モリス氏(宮城学院女子大学名誉教授)をお招きして講演会を開催した。

演題にある「菜切谷村他三箇村絵図」は北家に伝来した絵図であるが、その宛先には北家と同じく仙台藩士の但木土佐の名前が記されていた。なぜ但木土佐に宛てられた絵図が北家に伝わったのか。

その答えは、菜切谷村ほかの領地は始め但木土佐に与えられたが、翌年には北家のものへと変更されたことにあった。さらに、この領地変更の背景には側近を重職に任用する仙台藩4代大名綱村の人材登用策があった。新しい政策を矢継ぎ早に打ち出す一方、命令に一貫性がなく朝令暮改であるなど「短慮」と評される綱村。「名君」か「迷君」か、評価が分かれる綱村の政治が絵図を読み解きながら深められていく内容であった。

質疑応答は時間内におさまらず、講演終了後も講師への質問が続いた。地元の絵図から仙台藩政へとつながる魅力的なお話に、ご参加いただいた皆さまの好奇

心が大いに刺激された印象を受けた。



講演会のポスター

歴史資料学研究会

歴史資料学研究会 第19回例会・第20回例会

根本みなみ
(日本近世史／助教)

会期 2023年11月27日、12月18日

会場 オンライン開催

上 廣歴史資料学研究部門では2022年度から「歴史資料学研究会」として、毎月一回学内・学外の研究者を招いた研究例会を開催している。昨



歴史資料学研究会第20回例会ポスター

年11月の第19回例会では阿曾歩氏(フェリス学院大学)、12月の第20回例会では当部門の客員教員であるワシーリー・シェプキン氏による研究報告を行った。

阿曾氏は「江戸大槻家が見た仙台・一関」という題目で、大槻玄沢らを生んだ学者の「家」である江戸大槻家が、生家である一関大槻家や親族である仙台大槻家とどのような関係を形成したのかという点について、玄沢の視点から解明を行った。特に、阿曾氏は江戸へ出た玄沢が生家である一関大槻家への帰属意識を持ち続けたことに言及するとともに、一族との知的交流の実態を明らかにした。

ワシーリー・シェプキン氏は「近世日本におけるアイヌ語地名の定着過程—最上

徳内・近藤重蔵の探検記録をもとに」というテーマで、アイヌ語由来の地名に着目し、近世に行われた和人による地名調査の過程において、アイヌ語の呼称が地名として記録され、定着したことを明らかにした。また、同氏は地名としては不自然なアイヌ語が近世における和人の調査過程で「地名」として記録された事例も存在することに言及し、アイヌの人々にとっての「地名」の本来的な意味を考える必要性を今後の検討課題として提起した。

両氏の仙台～東北アジアを対象とした研究報告について、県内外から多くの参加者が集まり、当日は活発な議論が行われた。

パネル展示・第5回みちのく歴史講座

侍たちの江戸時代—仙台藩の組織と政策・仙台藩の古文書分析—

荒武賢一郎
(上廣歴史資料学研究部門／教授)

会期 2023年11月2日～29日

会場 仙台市営地下鉄国際センター駅1階、
東北大学川内北キャンパスマルチメディアホール

上 廣歴史資料学研究部門では、宮城県内の歴史資料保全活動を通じてさまざまな古文書を調査している。近年は、江戸時代の武士に関する資料が数多く発見され、その研究成果としてパネル展示「侍たちの江戸時代—仙台藩の組織と政策—」と、第5回みちのく歴史講座「侍たちの江戸時代—仙台藩の古文書分析—」を企画した。準備から開催に至るまで、センター教員のほか、共同研究「仙台藩における支配機構と政策決定の総合的研究」のメンバーと、川内キャンパスの発掘調査を進めている東北大学埋蔵文化財調査室に多大な協力を得ている。

仙台藩の研究は、たくさんの事例が紹介されているものの、いまだ不明な部分は多い。そのなかで今回は、①文書管理、②家臣団、③江戸屋敷、④土木工事、⑤山林資源、という5つのテーマを紹介した。たとえば①について、仙台藩で奉行(ほかの藩では「家老」に相当)を務めた大條家は、江戸時代から数回にわたって先祖から伝えられた文書の整理をおこなっている。その背景には、家を存続させるために主君(伊達氏)のために貢献した証拠を確認する必要がある。

第5回みちのく歴史講座では、パネル展示との関係から、仙台藩の中枢を担っていた「一門衆」や「宿老」といった藩主

のもとで活躍する重臣たちを取り上げた。2本の講演では、宿老を務めた後藤家、一門衆に含まれる岩出山伊達家の重臣・吾妻家について詳細な履歴を明らかにしながら、仙台藩の組織とは何かを検討した。



第5回みちのく歴史講座(2023年11月11日)

BOOKS

著書・論文紹介

RECENT PUBLICATIONS



ISBN 978-4-908203-33-6

文政10年東北農村の御用留 — 須賀川市桑名家文書から —

荒武賢一朗、武田作一編 東北大学東北アジア研究センター 2023年12月刊 text: 荒武賢一朗

江戸時代に作成していた文書は実に多彩である。町や村に現在まで保管されてきたものには、全国的に共通する書類もあれば、地域固有もしくは時代の特徴を表す文書があわせて含まれている。本書は、陸奥国岩瀬郡滑川村（現・福島県須賀川市）の庄屋を務めた桑名家に伝わる古文書のうち、文政10年（1827）の御用留を全文翻刻し、それに関する論考を掲載した。

御用留とは、江戸幕府や大名などの領主と、町や村の役人たちが文書を取り交わした際の控え（筆写）をまとめた帳面である。たとえば、領主から領民に対して発布される法令や、その反対に村落から役所へ上申される願書などの文面がそのまま記載される。このような文書は、領主側および

町村側で作成していたため、全国各地で発見されてきた。桑名家文書の特徴は、天明4年（1784）から万延元年（1860）に毎年1冊ずつ御用留を残し、それがほぼ現存することであろう。

公文書は「お堅い」「難しい」書類をイメージするが、本書の翻刻文を読み進めていくと、滑川村とその周辺における個性がみえてくる。同村は、奥州街道など主要な陸路に接しており、参勤交代で往来する大名や幕府役人をはじめ、旅路の途中で病気やケガによって故郷へ搬送される庶民たちの様子を書き記す。また、日常的な領主と領民の関係についても多くの示唆を与えてくれ、江戸時代の社会を知りたい方々へぜひおすすめしたい。



ISBN 978-4-908203-34-3

白石片倉家中・佐藤家文書

— 宮城県蔵王町・近世在郷武士の記録を読む —

荒武賢一朗、白石古文書の会編 東北大学東北アジア研究センター 2024年1月刊

text: 荒武賢一朗

「江戸時代の武士」と聞いてどのようなイメージを頭に浮かべるだろうか。サムライは刀や武器を携えているとか、城内を悠然と歩く姿など、いろいろと想像が膨らむかもしれない。いずれも「正解」ではあるものの、かたや村落に住む武士たちも存在した。江戸時代の仙台領には最大で20万人といわれる武士たちがおり、彼らとその家族を仙台北下にすべて集住させることはできないため、領内の町や村に日常的な居住地が設けられた。本書ではそのサムライたちを「近世在郷武士」と呼んでいる。

現在の宮城県蔵王町を本拠とした佐藤家には165点の歴史資料が伝来し、そのうち江戸時代末期までの情報を記す105点を選び、資料集としてまとめたのが本書である。

おもな内容は、①家系を示す書類、②江戸時代に主君から配給される知行宛行状、③武士としての勤務関連、④祭礼や婚礼などの記録、という4点が特徴といえよう。

「系譜」には、11世紀ごろからの由緒が示されているが、具体的な履歴がみえてくるのは16世紀初頭で、ちょうど佐藤氏が出羽国長井庄（現・山形県長井市）から移り住んだ時期にあたる。江戸時代に入ると、片倉景綱（伊達政宗の側近、白石城主）の家臣団に加わり、「一番座」という家格を得ているほか、さまざまな御用を担っていたことも記録のなかに登場する。収載する資料を詳しく読むと、「家の歴史」をはじめ地域や組織の歩みを知ることができる。

全学教育「東北アジア地域研究入門」

程永超

(日本・朝鮮半島研究分野/准教授)



	日付	講義題目	担当教員
1	10月4日	導入	高倉浩樹・程永超
2	10月11日	自然：東アジアの生物多様性	千葉聡
3	10月18日	自然：東アジアの生物多様性	千葉聡
4	10月25日	考古・民族：ホモ・サピエンスの拡散と文化的多様性の出現	佐野勝宏
5	11月1日	考古・民族：ホモ・サピエンスの拡散と文化的多様性の出現	佐野勝宏
6	11月8日	歴史：歴史のなかの遊牧民	岡洋樹
7	11月15日	歴史：歴史のなかの遊牧民	岡洋樹
8	11月22日	現代史：ロシア・ソ連史と東北アジア	寺山恭輔
9	11月29日	現代史：ロシア・ソ連史と東北アジア	寺山恭輔
10	12月6日	国際関係：エネルギー環境問題の現状と課題	明日香壽川
11	12月13日	国際関係：エネルギー環境問題の現状と課題	明日香壽川
12	12月20日	文化的多様性と移動 a: 沿岸地域と文化	デレーニ・アリーン
13	1月10日	文化的多様性と移動 b: 在日外国人と東アジア	藤媛媛
14	1月17日	文化的多様性と移動 c: 国際結婚と地域社会	李善姫
15	1月24日	試験	高倉浩樹・程永超

表：各回の講義題目

東北アジア研究センターは2023年度後期から全学年に向けて「東北アジア地域研究入門」という授業を開設した。

本授業は、地域研究が現代社会を理解するための基本的な手法であることを学生に伝えることを意図している。特に、日本列島とその周辺地域であるロシア・中国・モンゴル・朝鮮半島に焦点を当て、その自然・歴史・文化・現代社会について幅広く理解を深めることが求められる。本授業が重視するのは、地域研究が単なる地理や歴史などの学問ではなく、グローバルな視点での国家・民族・集団間の紛争・対立・交流を理解するための手法であるという点である。東北アジア地域は、その地理的な位置や歴史的な経緯から、様々な文化や民族が交錯し、

複雑な関係が存在している。東北アジア地域を理解するためには、国際関係や文化交流をグローバルな視点で理解することが不可欠である。

授業の準備段階では、コーディネーターの高倉先生と私が議論を重ね、センターの先生方とも協力して授業の内容や進行方法について熟考した。その結果、本授業は自然科学・考古学・歴史学・国際関係論・文化的多様性と移動といったテーマごとに、センターの教員によって多角的な視点から講義が行われることになった。受講生の範囲も広く、1年生から4年生までが対象となる。これにより、異なる学年の学生が互いの視点や知識を共有し、豊かな議論を行う機会が提供された。300人以上の学生が受講し

たことも、本授業の人気と重要性を示している。

授業の評価方法については、当初は各担当者が出題し、選択解答形式の記述試験を予定していた。しかしながら、予想を超えて受講者数が多かったため、マークシート型の試験へ切り替えた。この変更に伴い、Googleフォームを活用して試験を作成し、解答の自動採点や統計情報の収集が可能となった。これにより、教員は効率的に試験結果を分析し、授業内容の改善に役立てることができた。

私自身も半年間聴講していたが、その経験は非常に有益であった。特に、自分の専門外の地域やテーマについて学ぶことで、新たな知識や視点を得ることができた。また、異なる分野の教員から学ぶことで、東北アジアの地域がどのように複合的に結ばれているかを理解することができ、現代社会の多様性や共生についての考え方が深まった。

このように、「東北アジア地域研究入門」は、地域研究の重要性を伝えるだけでなく、グローバルな視点での理解や議論の場を提供することで、学生の学びや成長に大きく貢献していると思われる。さらに、本授業を通じて、東北アジア研究センターの存在と学術的な特色を全学の学部生にアピールすることができたと思われる。来年度には、本授業をさらに改善し、受講生に世界の複雑な問題に対する理解を深めてもらうことを期待している。

編集後記

第100号を迎えました。巻頭言では異分野統合部局としての進むべき道が述べられ、特集記事では本誌の歩みを回顧しました。今号は全13記事のうち、2012年に新設された上廣歴史資料学部門からの記事が5つあります。とても活発です。研究部門の新設自体がなかなか無いことです。東北アジア研究センターはこれからも成長していくことでしょう。(平野直人)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所組織です。

東北大学東北アジア研究センター
ニューズレター 第100号

2024年3月28日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会
発行：東北大学東北アジア研究センター
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook
をチェック!



X (旧Twitter)
をチェック!

